

書評

中村幸彦氏

「戯作論」

穆山人

中村さんの「戯作論」が出ましたのは、近來の慶事です。近世後期文学研究界の第一人者中村さんの著書としては、既に「近世小説史の研究」「近世作家研究」の中にもその一端が示されてゐたとはいへ、単行本としては、遅きに失した感がないでもありません。三十年前、私は、中村さんのその論に煙にまかれ、刺戟され、私如きも卒業論文に危く「平賀源内」を手がけることでした。その源内を途中で捨てましたのは、「八幡の敷しらず」に分け入り難い不勉強の私を自覚したからでした。「八幡の敷しらずを」「めぐりめぐつて、向ふ側へ出られる正しい道を」「迎り得」るのは、大変な難事なのです。三十年前既になみなみならぬ蓄積のあつた中村さんに「戯作論」は、現学界での待望の書といへませう。

書評 中村幸彦氏「戯作論」

中村さんは、克明にカードを採る人で、三十年前、中村さんの書齋には、充実したカードボックスがありました。「天下の町人考」をはじめ豊かな資料を駆使した的確な論考の数々は、そこを足場に生れたのです。戯作は開拓の不十分な、従つて、「詳述と実証」を必要とする分野なので、学界は、その学风から、学者中村さんに、数千頁にも及ぶやうな「戯作の大論文」「戯作の大著」を、期待したかと思ひます。中村さん自身「學術的に行きとどいたものをと念願するならば、一々に私の知る限りを詳述して、自然と、分量だけのことだが（筆者云、この九字は衍文、大論文・大著となるであらう。」とも記されます。

「しかし、戯作そのものについて、「感じてゐる余俗派的とか小味とか云つた風趣と、『大論文』・『大著』の語とが、『どうしても一つになら』ず、『戯作の大論文』・『戯作の大著』を『馬鹿馬鹿しい、黄表紙の外題ではあるまいし』と『こばみ続ける』文人中村さんも亦、私は極く自然に首肯出来るのですが、その文人氣質が結局、学界の期待に反して、B六版三百頁のこの小著となつたのです。

「これでも研究書を書きたかつた私は、その故にかへつて多くの点で戯作の側に妥協して、私の独りよがりの気持からは、戯作相應に、こんな小柄なものにしてしまつた。主目的たる戯作に直接関係するものは、略すわけには行かないけれども、その目的から遠ざかるものについては、その度合に応じて、その記述に、詳述と実証を一々示さないことにした。そのかはり、参考論文のあげるべきがあれば、それを示すことにした。」と、その意を示されます。

「詳述と実証」を下にふまへた研究書の重みを、文人氣質が「黙約の文章」にさり気なく流したものにだけに、初学者には、そこにあげられた参考論文を辿つたり、その

五七

書かれてないところに思ひをさせたり、相当の努力を払はねば、理解し難いかもしれません。

大よそ、読者といふものは、常に予想をもつて書物に接するものなのですが、その予想がその書物によつて充されますと、その書物は大変に立派な書物で、自分も大変に向上したかのやうな氣になります。かくて、一般読書階級の常識と上下する程の凡書が、世評を博するに至るのです。

が、この書物は、さうした世間通用の常識とは、隔絶した中身をもつてゐます。中村さんの名にこはもてすれば別ですが、初学者には、恐ろしく取つ着きの悪い、第一章が第二章くらゐで投げ出したくなる書物であるかもしれません。

中途から言ふのも変なのですが、私が話しかけてゐるのは、初学者です。一人前の人には自分の眼があるはずで、新刊紹介を必要とするのは、初学者に限ると思ふのですが、初学者に対して、特に、近世文学、就中、後期でもやらうとするなら、初学者の予想を裏切るものであるがゆゑに、参考

論文を辿り、深く考へて、辛抱強く、この書物を理解しようと、努力することをすすめたいと思ふのです。さうすればはじめて、初学者は、近世後期文学に対する本物の基礎知識を得ることが出来ると思ひます。寝ころんででも理解出来るやうな書物を何十冊読んででも無意味なのです。ついでに老爺心から申し添へますと、取つ着き悪いと言ひましても、表現だけが難しいもの、むしろ中身のないために表現だけを難しくしたもの、中身の豊かな故に難しいのとは、はつきり區別してもらはねばなりません。読んだあとで、自分の知識乃至は思想が、どれだけ改められ豊かにされたかどうかでその事は區別出来ますので、虚心なら、誰にでもすぐに感じとられます。

疎目次

前言

(七頁)

第一章 戯作の意義	(一九頁)
第二章 戯作の發生とその精神(一)(二頁)	(二二頁)
——文人趣味とその推移——	
第三章 戯作の發生とその精神(二)(四頁)	(二四頁)
——離世的精神——	
第四章 前期戯作界	(一九頁)
第五章 後期戯作界	(三四頁)
第六章 戯作表現の特色(一)	(三五頁)
——発想法——	
一 うがち	
二 ちやかし	
第七章 戯作表現の特色(二)	(四四頁)
——構成法——	
第八章 戯作表現の特色(三)	(二六頁)
——趣向の形式——	
第九章 戯作文章の特色	(二八頁)
第十章 戯作風風の推移	(二三頁)
後語——近代への接統——	(二四頁)
あとがき	(五頁)
索引	(一一頁)
まづ、中村さんが、この本を書かれた理由を紹介いたします。「前言」に大よそ次の如く記されます。	

戯作は、「現代の日本人が、自国の文学の古典」の中で、「最も冷淡にあつかひ」「蔑視」する作品で、「日本文学研究の対象として」も「最も取り残された分野」なのですが、「かくも」「現代人と戯作の間に」「疎隔を来したの」は「何故」かと問ふところからはじまります。

「明治以後の近代文学」にあつてはそれ「以前の日本の古典文学と如何にして絶縁するかの方途」が、「最大の方途」の「反面」として「顯然と存在し」てゐましたので、中でも近世文学、特に「最も近代に近い時代で、最もきびしく否定されたものの中にこの戯作が」あり、さうした「文壇」の「思潮」が支配して、「国文学者の間でも」「戯作の評価」を低くしたといふのです。

「現代文学は、様式によつて程度の差はあるが、作品の内容を専一とする。換言すれば何をあつかふかが第一の問題であるが、戯作はどう書かが常に第一の関心事で、換言すれば、表現を主とする文学だつたやうである。」戯作の「気分、構図的、類型、

喜劇性、表現第一主義などが、日本のそれ以前の文学に既に、例のあることであるが、日本文学の歴史の長い間の残滓の如く、それらが混然として、濃厚に、戯作の中に沈澱してゐて、醗酵するとも見られる。その点からも、古い日本文学と一応絶縁した現代文学から見れば、最も異質的な文学だといふことにもなる。」とも、「戯作が広く世界文学を見渡して、珍しい文学であつたことには間違なく、」「外国文学には認められない日本の特異さが、濃くここにはあるのかも知れない。」とも書かれます。

つまり、「戯作はどうやら、非現代的であると共に、非西欧的である。これに現代的、西欧的方法で相對する時、その本質にまでせまり得ないものが残るのではあるまいか。今の研究方法で割り切れない故をもつて、軽視してゐる所が、もし戯作の本質であるのならば、戯作を軽視してゐるのではなく、戯作に翻弄されてゐるのではないかとの疑懼もないではない。当然のことながら、以下の検討においては、何かとらへられた方法をもつて相對するのではなく、戯

作に出来るだけ即して考へて行かねばならぬことを、自ら戒心せねばならないやうである。」といふところに達します。

私は先きに、この本は要約出来ないと書きましたが、強ひて抜き書きしてみても、中村さんの意を正確に伝へてゐないことを思はざるを得ません。しかしながら、「前言」のこの結びは、ひどく控へめながら、中村さんがこの「戯作論」を書かねばならなかつた伎養と、戯作の本質に対する見通しと、その研究方法を的確に示唆するものと言へませう。

かうした前提から、戯作の本質が追求されるのが本論なので、本来なら、次いで、本論の解説をすべきですが、この密度の濃い本論を要約しながら紹介することは、私の手に負へぬことゆゑ、紹介頁数の少なさを口実に、本論の紹介は先記の疎目次に強ひて譲つて、一挙に「後語」にとびます。「前言」の意図から、本論では「戯作文学の持つた現代文学との異質的なものに重点を置いて述べられたのですが、「後語」では、むしろその反対の点が述べられてゐる

ます。「歴史的に見て、戯作と近代の小説とは、全く否定的にのみ接続するかと云へば、さうのみとも限らず、「その間の」

継承関係をたぐり出して、「簡略に、図式的に記」されたものです。といふことは、本論と無関係に述べられたのではなく、本論を深めたところに、その反面として、はじめ出て来る見解ですので、その点、本論を省略して、「後語」に及ぶ紹介の意味も若干ないわけではありません。と、気安めを言つて置きます。

戯作文学と現代文学との「異質的な『様相』」の中にも、「ストーリー第一主義の『説話』から『人間社会の探求』への『指向』、「短編の集合』から『長編』化への傾向、「聴覚的文章から視覚的なものへの変化」、「口語文脈』の『進歩』、「写実的な物の見方や表現の仕方』の『部分的』な『進歩』、「小説批評』の成立など、戯作文学においても、「大勢は、小説をとりまく外郭や表現の面では近代を指向するものが多かったが、思念的な面では、近代未だしの感が濃厚であつたことになる」とし、その理由を、

戯作は「漸く実用的な娯楽として存在価値を認められただけ」の「俗で第二文芸であつたから」とされます。

ところで、それに対する雅で第一文芸である漢文学や和歌などを顧ますと、例へば、香川景樹の和歌理論は「既に近代に入るとさへ思はれるが、作品そのものを見れば、「古今集以来の伝統から全く脱するところが出来ない」といふ現象も見られるのです。

このあと、巻末に、中村さんは、次の如く記されます。――

かく考へて来ると、俗文学の世界では、近代的表現を志向しての進歩があつたが、精神的覚醒が伴はなかつた。雅文学の世界では、近代的文学精神の覚醒は次第に認められるが、近代的な表現がそれにそはなかつた。各はその片端なまゝで、近代的なものを別々に発達させた形で明治へ流れ込んだのである。坪内逍遙は『小説神髓』で馬琴を批難したが、逍遙の文学人情説よりは、馬琴の勸懲的作品の方が、思想の文学的消化といふ点で、逍遙より一步先んじてゐた

所もあつたのではなからうか。正岡子規は香川景樹とその桂園派の和歌を批難し、「景樹といふ男はくだらぬ男なる事、(中略)若し彼の鼻負せん者あらば尽く同罪たるべき者なり」(『歌話』)とまで述べたが、子規の打立てた文学観と、最も近い考へを持つてゐたのは実は景樹その人であつた。しかるに逍遙も子規も、馬琴や景樹の持つた悪い部分をのみ攻撃した。自己らと相違する面のみを攻撃して、同系の部分に眼をかけようとしなかつたのである。(筆者云、その逍遙や子規の言ふことのみに従つて、自分の眼で事実を確かめなかつたのが、文壇の思潮であり、ひいては、国文学界の評価でもあつたのである。)

第二文芸の達した表現、第一文芸の達した思念の各々の新しいものを、第一文芸の達した文学の芸術的評価の下に統合すれば、近代文学が、勿論小説をも含めて、成立するかと思はれる段階に、明治を前にして、日本の文学界も達してゐたとも見えるのである。がそれは形式的な理解であつて、実際にその統合は至難事であつて、第一、第

二両文学界ともに、さうした力と可能性はなかなか生れてこなかつた。もしここに第一、第三文芸界に共に通じた人があつたならば、如何であらうか。実は俳諧をやり和歌をたしなんだ正岡子規は、さうした人であつた。古典文学の雅俗に親しんだ坪内逍遙も実はさうした人であつた。彼らが近代文学の創始者であり得た、一つの原因は、この近世に起つて、近世を通じて分れて来た雅俗の兩作品に親しみ、又身につけてゐたからである。ただし、両方に通じ、親んだだけで、雅俗を渾和統合し得るものではなかつた。平賀源内や上田秋成らも、雅俗に出入したが、まだ逍遙、子規までに至らなかつた。明治に入つて、西欧の文学作品と文学意識、又、人間社会についての新思想の輸入があつて、逍遙や子規らはその洗

礼をうけた。この西欧的なものを媒介として、雅俗二つの文学界に発生したものが、なほ幾多の変転を経ながら、統合して、近代文学、近代小説となつてゆくのである。

以上が戯作と近代小説との関係の図式である。小説史の現実を目を転ずれば、明治十八年『小説神髓』が出て、小説は芸術の一にして、人情を主腦とし、「限りなき人間の情慾を限りある小冊子のうちに網羅し」、之をもてあそべる読者をして自然に反省せしめるもの、「竟には伝奇、戯曲を凌駕し、文壇上の最大美術の其随一」となるべきを予言した。同二十五年内田不知庵の『文学一斑』には、「文学とは人生に属する諸現象の研究」と明記してある。戯作を戯作であまじせしめた小説観はかくて払拭されてゆくのである。そして新しい

「創作」とよぶ小説がやがて生れ出る。それでも、「小説は美術なり、実用に供ふべきものにあらねば、其実益をあげつらはむことなか／＼に曲ごとなるべし」と云ひつても、『小説神髓』も、流石に新しい意味のものであるけれども、小説の四大裨益をかけた。石橋忍月の進歩的な評論の中にも、小説の効用を説いたものがある。それは小説を娯楽と見て軽視する古い風習をさける為には当時としてもなほ不可欠な処置だつたことを思ふべきである。――

以上で、「後語」が終ります。至つて放肆な紹介ですが、紹介を抜かした本論を読む氣を、初学者に起してもらへたら、幸いです。